

## §4.2.

### 仮説の検討

まず、本章第1項の目的において示した仮説に沿って本実験の結果を振り返る。仮説を支持する結果が得られた場合には T、仮説に結果が適合しない場合には F と表記した。

#### 1. 仮説 1

**仮説 1** 肌色の明るさによって顔から得られる性別の印象は調整される。つまり、肌色における従来のジェンダーステレオタイプの通り、色黒肌が伴う場合はより男性的に、色白肌が伴う場合にはより女性的に評定される。

- ・瞬間提示条件           ：男性 T / 女性 F
- ・無制限提示条件       ：男性 T / 女性 F

本仮説は肌色による性別の印象変化を示すものであるが、男性観察者のみにおいて仮説を支持する結果が得られた（本章 3-4 項参照）。一方の女性観察者においては当該の肌色の作用が見られなかったといえる。提示時間別に 2 要因分散分析を行なった結果に基づいた場合はこのような結論を導くこととなる。

だが、両条件を合わせて行なった 3 要因分散分析結果では、女性観察者においても肌色の主効果が有意傾向となったこともここで確認しておきたい。また、男性観察者の同分析結果においては、肌色明度と提示時間の交互作用が見られていることにも注意しなければならない。ここでは、特に低明度の設定において提示時間の差が大きくなることが判明したが、肌色条件から見れば、瞬間提示条件において肌色間の差が顕著となるといえる。これより、観察時間が極端に短縮されることにより肌色により強く頼った評定がなされることが考えられる。時間的干渉下における肌色の作用は潜在的に存在する肌色のジェンダーステレオタイプの存在を示唆するものであり、観察時間の延長による肌色の作用の低下は当該の要素が副次的な参照枠となっていたことを示唆するものと捉えられる。

また肌色の影響に関して捉えておくべきは、顔パターンによって作用が大きく認められる場合と全く作用しない場合とがあるということである。肌色明度と性別評定との回帰分析結果からも読み取れるように、男女どちらかのパターンが確実に優勢となっている場合に（25%パターンや 75%パターン）特に肌色が影響を強める傾向があると考えられる。実験 A-2 においては、特に女性平均顔において肌色の作用が強くなるという傾向を得たが（第 1 章参照）、これを踏まえた場合、女性化を強めることによって更に肌色の影響が強まることも推測される。反対に、男性化を強めた場合には肌色の作用が弱まるか、変化しない可能性があると考えられる。

## 2. 仮説 2

**仮説 2** 顔から得られる性別の印象により感知される肌色の明るさは調整される。つまり、女性的な印象が伴う場合には肌色はより明るく、男性的な印象が伴う場合には肌色はより暗く感知される。

- ・瞬間提示条件           ：男性 T / 女性 T
- ・無制限提示条件       ：男性 T / 女性 T

本仮説については、男女共提示条件を問わず適合的な結果が得られた。このような結論は肌色評定に対する合成レベルの影響が見られたことから導かれたものである。3-3-2 項において明らかであるように合成レベルの主効果は有意であり、グラフにおいては、同明度の設定であっても女性パターン合成率の低い顔は色黒寄りに、女性パターン合成率の高い顔は色黒寄りに評定されたことが分かるであろう。

しかし、ここで合成レベルによる影響と性別の印象を同値として考えてよいのかという問題が生じる。何故なら、認知レベルではなく知覚レベルにおいて形態的な違いが作用した可能性が残されているからである。つまり、女性的、男性的といった性別の印象を経由せずに、顔パターンが持つ形態情報そのものの作用によって感知される肌色の明るさに差が生じたことも考えられるのである。この点については、瞬間提示と無制限提示との傾向の比較をすることによって示唆が得られ

と思われるが、当該の結果を参照しても結論を出すことは難しい。何故なら、肌色明度評定に対する 2 要因分散分析において男女で異なる傾向が見られるからである (3-3-2 項参照)。

瞬間提示条件の方が性別の印象を評定しにくい条件であるとするならば、評定にはより好条件である無制限提示下において合成レベルの主効果が大きくなることが予想される。男性観察者においては、このような傾向がそのまま得られたといえる。だが、女性観察者においては、合成レベルの主効果は両提示条件で有意であるものの、むしろ無制限提示条件においてその影響が強まっていることが捉えられるのである。

顔パタンの違いによって肌色の明るさが異なって感知されたとするならば、物理的要因による錯覚という可能性について第一に考えてみるべきであろう。面積に対する肌色の濃さによって全体的な肌色の明るさが測られていたとすれば、丸みを帯びた形態では外へと膨張した印象によって面積が大きく感知され、結果的により明るい印象となることが予想される。反対に、ごつごつした形態では内へと凝縮された印象が生まれ、感知される面積が狭められた結果、より暗い印象になった可能性もあろう。

しかし、少なくとも男性観察者の結果については物理的な差異のみでは説明しきれない部分が残るといえる。等明度設定の異パターン同士の間にも本来的な明度差が存在するとすれば、その影響は提示時間に関わらず等しく確認されてよい筈である。だが、実際に得られた結果においては瞬間提示という時間的干渉が加わった場合において顔パタンの主効果は消失した。このような時間的干渉の有無による結果の違いをもたらしたのは、観察時間の制限による顔パターンから性別イメージへの変換のし易さの違いであったことと推測することもできよう。

更に、形態情報に対する瞬間的な情報処理における男女差についても探ってみなければならぬ。刺激そのものに由来する差がないとするならば、その解釈、認知において男女差があるということが推測できるであろう。本実験では多くの場面において女性観察者の方がより形態情報に基づいた判断をしようとする傾向にあった。逆に考えれば、女性観察者は肌色という情報に惑わされずに判断や評定をしようとしていたようにも捉えられる。この傾向は、女性の方が肌色を調整し、利用する場面が多いことからもたらされているとも推察される場所である。

女性は化粧をする。本実験後に行なったアンケート結果にも明らかであるが、女

性は色白を望む (Figure 4-4-6 参照)。現在の肌色と理想との違いの存在もアンケート結果は示しているが (Table 4-4-3 参照)、この理想と現実の差を埋める、もしくは縮める手段として女性には化粧がある。日々の化粧を施す中で女性は肌色の変化を経験することになるであろう。しかし、肌色が変わったとしても形態的要素は変わらない。更に、性別までが変わるわけではない。この事実は女性自身が最もよく理解していることであろう。つまり、肌色の変更に関して女性は仕手である分、肌色の作用を理解しながらより安定的な情報に頼った判断 (評定) をしたのではなかろうか。そのように評定する中、時間的干渉が加えられた条件であってもできるだけ形態情報のみから性別の印象を引き出す方略を手に入れた可能性も考えられる。

以上に示したように、仮説 2 (肌色明度の感知に対する性別イメージの影響) については特に男性観察者において仮説を支持する結果が得られた。本実験結果のみから性別イメージの直接の影響を結論することは難しいが、更に追究すべき傾向は認められたといえる。

### 3. 仮説 3

**仮説 3** 仮説 1、2 の傾向は肌色に対するステレオタイプの観念の強さによって規定される。

#### 仮説 1

- ・瞬間提示                   : 男性 F / 女性 F
- ・無制限提示               : 男性 F / 女性 F

#### 仮説 2

- ・瞬間提示                   : 男性 F / 女性 F
- ・無制限提示               : 男性 F / 女性 F

何れの傾向共、観察者群、提示条件を問わずステレオタイプのな認識の強さによる違いは見られなかった。ここで検討すべきは肌色、合成レベル、ステレオタイプの3要因の交互作用であるといえるが、何れの場合も有意ではなかった。つまり、本仮説は支持されなかったといえる。

ステレオタイプの主効果及び当該の要因を含む交互作用は肌色評定において若干確認されたが、まとまった傾向を抽出することは困難であった。

本実験の結果から判断すれば、肌色に対するステレオタイプのな捉え方が強いからといって男性的な印象が強い顔を色黒、女性的な印象が強い顔を色白に評定するわけではないということがいえる。別の捉え方をすれば、内的に持つステレオタイプが極端であっても、対象から印象を得る場において認知的な調整はなされないということになる。

また逆に、肌色による性別の印象の変化は観察者のステレオタイプ特性によって規定されるものではないとも考えられる。この結果については、各群の人数を拡大した上で追試することが肝要であるが、ステレオタイプが作用するとしてもそれは明度を認知する段階までであり、その情報を性別の印象に変換する段階ではないことが本実験結果からは推測される。

総じて、肌色に対するステレオタイプのな構えが作用するのは情報処理においてより早期の段階であり、認知された情報を更に意味付ける段階では差異が生じにくいことが判明したと捉えられる。